

理学療法士との関りから得た利用者の笑顔

～座間養護学校PTとの連携について～

秦野精華園 伊勢原市西部地区生活介護事業所ひびた
石坂 俊介 立岡 裕子
二見 祐子 下道 昌弘
岩本 説子

1.ひびたの概要について

ひびたは、平成19年7月1日に開所した。もともとは伊勢原市の比々多福祉館があった場所であり、昭和48年に建てられた古い建物をリフォームして大事に使っている。

「主に伊勢原市・秦野市在住の重度の知的障害者の方が安心して通うことができる場所に」というコンセプトで支援を行い、今年度で開所12年目を迎えたところである。



ひびたに通所されている方たちの居住地については、伊勢原市の方11名、秦野市の方が3名とその2市の方が中心であるが、利用者さんの入れ替わりや、ニーズに応える形で厚木市や平塚市に在住の方の受け入れを行っており、現在は厚木市の方も3名利用している。

また平塚市の方も利用を開始しており、広範囲に渡っての送迎に奔走しているところである。なお、座間市の方は秦野市にある秦野精華園のGHで生活されている方である。現在定員20名で、20名の方が契約し、利用している。他事業所と併用している方もいる。

年齢構成は右の表の通りで、平均年齢は35.4才となっている。開所からひびたを利用しながら

年齢を重ねてきた利用者は徐々に機能的に下降線をたどっている方もおり、ひびたにおける課題

<居住地>

●定員20名(現在男性8名・女性12名 計20名契約)

<平成28年度>

住所	伊勢原市	秦野市	厚木市	平塚市	座間市	合計
人数	11名	4名	1名	2名	1名	19名

<令和元年度>

住所	伊勢原市	秦野市	厚木市	平塚市	座間市	合計
人数	11名	3名	3名	2名	1名	20名

令和元年度

	～20歳	21～25歳	26～30歳	31～35歳	36～40歳	41～45歳	46～50歳	51～55歳	56～60歳	合計
男性	0名	2名	3名	0名	2名	0名	0名	1名	0名	8名
女性	1名	1名	0名	2名	2名	3名	1名	2名	0名	12名
合計	1名	3名	3名	2名	4名	3名	1名	3名	0名	20名

令和元年11月1日現在

最高年齢:54歳
最少年齢:20歳
平均年齢:35.4歳

のひとつとなっている。

障害状況について。2年前に比べて重度重複化が進み、肢体の身体障がい者手帳を所持している方も増え、理学療法のアプローチが必要な方が増加していることが見て取れる。

また重度化していることは、障害支援区分にも表れてきているのが分かる。2年前と比較して平均区分が少しあがっている。

令和元年度 体験交流セミナー③

<身体障害者手帳取得人数>

平成28年度

種類	視覚	聴覚	内部	肢体	合計
人数	1名	0名	0名	4名	5名

平成29年3月末日現在

令和元年度

種類	視覚	聴覚	内部	肢体	合計
人数	1名	0名	0名	7名	8名

令和元年11月1日現在

<障害支援区分>

平成28年度

●平均区分
5.3

	区分4	区分5	区分6	合計
男性	0名	1名	7名	8名
女性	3名	5名	3名	11名
合計	3名	6名	10名	19名

平成29年3月末日現在

令和元年度

●平均区分
5.45

	区分4	区分5	区分6	合計
男性	0名	2名	6名	8名
女性	2名	5名	5名	12名
合計	2名	7名	11名	20名

令和元年11月1日現在

そのような状況下で、できる限りひとりひとりの障害特性や身体状況に併せて支援をしていきたいとの思いから検討されたことの一つが本日発表させていただく理学療法によるアプローチである。

2. 理学療法士導入の経緯

平成25年度に、厚木精華園の地域サービス事業であった「専門スタッフ地域巡回支援事業」により、理学療法士を派遣があった。

「専門スタッフ地域巡回事業とは、神奈川県による指定管理施設の地域サービス事業の一環として、厚木精華園が近隣の事業所に対して、専門スタッフを派遣することにより、障がい者支援の向上を目指すことを目的として事業がスタートした。

平成25年度に4回講師を派遣していただき、「拘縮について」や「可動域について」の研修も行い、個々の利用者プログラムを見直した。

平成26年度には1回、平成27年度に講師が変更したが、2回派遣があった。

その後、平成28年度からは指定管理の事業から外れ、厚木精華園が自主的に事業展開し、派

遣があったが、理学療法士の勤務日数が減り、ひびただけではなく、近隣の他事業所への派遣も行えなくなったという経過があった。しかし、それまでに得た利用者個々のプログラムを引き継ぎ、継続支援をした。

3. 座間養護学校理学療法士訪問 (経緯・先生の紹介)

平成30年4月より座間養護学校の卒業生であるAさんが利用を開始した。



ひびたには週2回の利用で、愛名やまゆり園の飯山地区日中活動支援センター「ポラーノの広場」も週2回利用を開始している。とても元気な利用者で、歌が大好きな、笑顔の素敵な女性である。身体障がい者手帳2級を持ち、車椅子を利用しているが、手繋ぎであれば自力歩行が可能である。しかし、集団参加が難しく、パーソナルスペースに入るのに時間がかかり、利用開始当初は、昼食を食べられない日々が続いたため、座間養護学校の前担任で進路支援担当の教諭に連絡を取り、支援アドバイスを受けることになった。教諭が来所すると、表情が柔らかくなり、食事も教諭の介助支援で食べることができ、途中でひびたの職員に交代しても続けて食べることができた。

教諭と懇談し、養護学校で抱えている課題や、生活介護事業所での課題などの話をしていく中で、理学療法士派遣の依頼をすることになった。

平成30年8月に第1回目の訪問があり、座間養護学校 自立活動教諭 理学療法士(以下、PT)との出会いがあった。

平成31年3月には第2回目の訪問があった。

令和元年8月に3回目の訪問を依頼した時に、体験交流セミナーで「理学療法士との関わりから得た利用者の笑顔」について発表したい旨を話し、協力依頼をした。後日、座間養護学校の見学をさせてもらい、見学後に体験交流セミナーの発表内容について相談をしたところ、教諭から改めて進

令和元年度 体験交流セミナー③

路支援担当としての地域移行に向けてのかかわりについて、話があり資料提供があったものが次の内容である。

座間養護学校のアフターフォローは、企業就業も、福祉事業所などへの移行についても3年間としている。

ひびたに移行したAさんのアフターフォローをすることで、ひびたの利用者さんや職員とかかわりを持つようになった。それをきっかけに、理学療法士との連携につながった。

養護学校生の地域移行については、学校を卒業して「おわり」ではなく、卒業後の生徒たちをフォローしてスムーズな地域移行を目指し、学校、事業所、地域支援機関と連携していくことが大切であると感じていると、教諭から話があった。

4. 理学療法士来所時の様子（Sさんの紹介）

Sさんは29歳の男性で、火曜日と木曜日の週2回ひびたを利用している。

視覚障がいがあるため、突然体を触られるのが苦手である。

光の明暗は認識している様子で、Sさんの周りが明るいよりは暗い方が落ち着いている事が多い。そのため、マット上などではうつぶせで過ごしている。

Sさんについて

- 29歳男性 平成21年2月から利用
- 療育手帳A1 身体障がい者手帳1種1級
- 視覚障害 肢体不自由(四肢体幹麻痺)
- 光の明暗は認識できる程度。
- 床やマット上では不安・緊張がある様子で仰向けよりもうつ伏せで過ごすことが多い。
- 側窩があり、右足を座面に乗せている
- 右足は座面に乗せている事が多い。



今年8月にPTに日中活動の様子を見てもった時の様子。

一つは SRC ウォーカー使用時の様子
もう一つは 安楽な姿勢での過ごし方、その際の配慮すべき点。

主に午前の活動で取り組んでいた SRC ウォーカーに乗っているときの様子や身体機能についてアドバイスを受けた。

ちなみに、SRC ウォーカーとは Spontaneous(自発的)スポンタニユアス Reaction(反応)リアクション Control(調節)コントロール Walker(歩行器)ウォーカーの略称で、主に下肢で十分に体重を支えることができない子供でも立位姿勢が可能となる移動補助具のことである。

SさんがSRCウォーカーに乗っている様子をPTに見てもらう。

・SRCウォーカー乗ることで股関節が圧迫されている様子。

その為か右膝裏あたりが紫色っぽく変色している。また、サイズが合わず痛みがあるため足を地面に着けようとしなのではないか。

・SRCウォーカーに代わる運動プログラムを考えてはどうか。との意見をもらった。



PTのアドバイスを受けて、Sさんの体にSRCウォーカーのサイズが合っていなかったことは、以前より課題として課内で検証していたこともあり、使用を中止して、現在は使用していない。

更に車椅子から降り、安楽な姿勢での過ごし方や、その際の配慮すべき点についてアドバイスを受けた内容は下記のとおりである。

- ・車椅子から降り、立位を保持する取り組みは今後も続けていくと良いと思われる。
- ・膝伸ばしについてはクッションなどを活用し、無理のない範囲で少しずつ伸ばしていくと良い。また膝伸ばしは車椅子上でも行うことができるので、行ってみてはどうか。
- ・マット上やベッド上で過ごす際のマッサージについては、背中から足先に向かうようにマッサージをすると良い。
- ・普段、動かしていない筋肉や筋を伸ばすことがストレッチになるとの話があった。

令和元年度 体験交流セミナー③

- 一般的に手と足であれば、手のほうが敏感で、Sさんの体に触れる際、末端からではなく、体幹から触れるようにすると良い。末端(掌、足など)から触ると、キュッと縮まろうとする。
- 車いすから降り、安楽な姿勢をとることはよいことなので続けていくように。
- 可能であれば、マット上で後ろから抱えながら座位をとることも行ってはどうかとアドバイスを受けた。



25



ここからは、PTのアドバイスを受けてその後の取り組みを紹介する。

Sさんも含め日中活動に参加される際に、ひびたでは、日常生活上の支援を行いながら、楽しく充実した日々を過ごせるよう、利用者個々の能力や特性に応じて歩行や創作活動などの日中活動を支援している。また歩行一つとっても、個々の利用者の特性やペースに合わせ機能維持及び機能低下予防に取り組んでいる。今回PTからのアドバイスを受け、今後もSさんの機能維持、低下・予防に取り組んでいく必要性を強く感じた。

もうひとつの取り組み、特にSさんへのマッサージについては、Sさんに負担がかからないような行い方についてPTよりアドバイスを受けたことを書面にし、他職員がSさんに関わる際の参考とした。書面だけでの伝達では難しいため、実際に取り組んでみての疑問点や感想などを職員同士で話し合い、検証をすることで安心した環境の中でSさんが過ごせるよう配慮している。

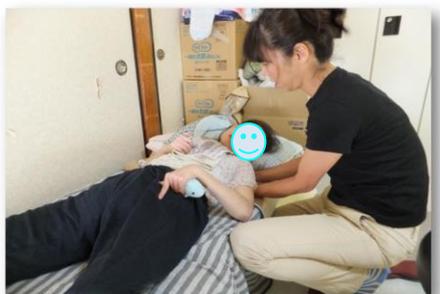


5. Bさんの紹介

ここではまず、Bさんのこれまでのひびたでの様子について紹介していく。現在年齢 34 歳、養護学校高等卒業後、作業所はるたけを利用。その後平成 19 年、21 歳の時よりひびたの利用を開始。療育手帳A1、身体障がい者手帳 1 種 2 級。平成 23 年 11 月頃から足の動きの悪さが進行し始め現在はリクライニング機能のある車椅子を使用。身体拘縮の進行が早いのでマッサージを中心に行っている。平成 31 年度 3 月よりご家族の希望により血流促進のための足浴を行っている。



ひびた利用開始時期の日中活動としては、歩行をメインに職員の手を取りゆっくりの歩行を一日40分程度行っていた。平成23年度頃より足の動きが悪くなり、歩行中に座り込んでしまうことが見られるようになった。平成24年度頃より手足の拘縮が進み、足の甲の湾曲が酷くなり歩行が困難になったため移動は車椅子を使用。平成26年度、筋弛緩剤を服用し始め自分でスプーンを持つことが困難になり全介助で食事を摂るようになり、それ以降から現在に至るまで身体機能維持のためのストレッチやマッサージをメインに活動を提供。ひびたに通われてから現在に至るまで大きな体の変化を遂げている。



写真は、PTよりマッサージを受けている様子。ひびたでは車椅子上で過ごす時間が多いが拘縮が進んでおり機能維持を図るためベッドに横になり10分でもいいのでリラックスできる時間を設けると良いとのアドバイスを受けている。

具体的には、Bさんがベッド上に横になり背中をマッサージしたり、両掌の第一関節の指を両肩甲骨内側に当て、左右に優しく揺らしたりという方法を勧められた。

下の写真ではベッド上に横になり体を伸ばした状態でストレッチを行っている。拘縮のため両肩がすぼまる姿勢になりがちだが、肩甲骨を開いて

姿勢を整え腕のストレッチを行っている。肘、手首、握っている指先を少しずつのばし手のひらや手の甲を優しくマッサージしている。

Bさんの表情を見ながら行っているが、とてもリラックスした表情を見せてくれている。手のひらを伸ばし過ぎると皮膚が突っ張るので注意して行っている。



左下の写真は後頭骨の下の首部分のマッサージをしている。

右下の写真はBさんの腰の下に両手を入れ左右に優しく揺らしている。PTに指導していただきひびた職員が行っている様子が写っている。



足浴を行っている写真。平成30年度よりご家族の希望により足浴を開始した。気温が下がってくると手足が冷えるため血流促進のために行っている。15分程を目安に職員と話したりマッサージをしたり関りを持ちながらゆっくりと過ごしている。

足浴後は足を清潔に保つため上がり湯をする。Bさんの母は便秘の症状が緩和されると大変喜ばれている。



Bさんやひびたの職員と関わってのPTの感想は以下の通りである。

- ・平成30年8月の1回目の訪問当初は車椅子のチルト機能とリクライニング機能を動かしてポジション作りを教えた。Bさんは緊張が強く辛そうだなと思った。
- ・ひびたでのトイレ誘導は職員2名で抱えて対応していたので車椅子上でのおむつ交換を伝えた。Bさんも職員も大変そうだなと思った。
- ・Bさんは以前歩行が可能だったとの話を聞いてどんな人生を送ってきたのかなと思うようになり、今歩けなくなっている現状を見て、体はだれしも変わったり衰えたりしていくものだが、学校として何かできることがなかったのだろうかと考えさせられた。
- ・Bさんに限らず、ご家族の願いがあり、限られた状況の中であっても、違う視点で一緒に考えてくれる人がそばにいてくれることで利用者さんのためにより良い支援を提供できこれからの人生が更に良い方向に向かって行けるのではないかと。

とのこと。また、ひびたでの支援を通じて感じられたことについては以下の通りである。

ひびたに訪問し、ひびたの環境面の大変さ、利用者さんの障がい特性の幅広さ、身体介護の必要な方々への支援方法を学ぶ機会の少なさ、成人期から老年期への対応の困難さを感じた。

支援者へのアドバイスとして、身体特徴を知ること、支援者・利用者にとって優しい支援方法を知ること、車椅子の機能の有効活用について伝えること。利用者さんにとってQOLの向上につながる支援の方向性を考えること、予防的な観点から適度な運動を確保すること、リスクについても伝えることが大切であると感じたというPTの感想をいただいた。

6. まとめ

座間養護学校の先生方との連携により我々が得たものも大きい。一番プラスになっているのは理学療法のアプローチが必要な利用者に対し具体的な身体状況の説明や心地よいストレッチ方法、マッサージ方法について助言いただけることである。小玉PTには身体障がい者手帳がない方へも姿勢などへの助言をいただいております、日々の

取り組みが行われることは利用者さんにとって大きなメリットとなっている。

また、先生方へのアドバイスのおかげで我々職員のスキルアップにも繋がっており、支援する側、される側お互い負担の少ない介助について学ぶことができる良い機会となっている。

更に理学療法を介した心地よい関りは機能維持だけではなく利用者のリラクゼーションにも繋がってリラックス効果を感じられるものになっている。利用者の体の構造・特性に合わせ無理なくストレッチをしたりそっと触れたりすることで拘縮や緊張で固まっていた利用者の体が緩み、リラックスしていることを実感でき、そのリラックス効果により笑顔が増えていることを感じる。

マッサージやストレッチで体を緩めている時、利用者はとても素敵な笑顔を見せてくれ職員も幸せな気持ちになる。短時間ではあるが、しっかり利用者向き合い触れ合えるこの時間は職員にとっても非常に大切な時間である。

また、この座間養護学校との連携は理学療法の取り組み以外にも学校と成人施設の相互理解にもプラスに働いているのではないかと。座間養護学校との連携は大変意味深いものとなっている。

もちろん悩みや課題もあるが、ひびたは重心の方や身障手帳を所持している方も多く、利用者の加齢や機能低下に伴って今後も理学療法のアプローチの必要性がますます高くなることが予想される。

現在ひびたの建物は大変狭く、他の利用者との距離も近くなってしまい、安全にゆったりとマッサージを行える空間の確保が難しい状況にある。多動な利用者もおり、空間の共有が悩ましいところであるが、このことに関しては次年度現在の建物から秦野精華園本体へ移行することで落ち着いた環境でゆったりと取り組める環境作りができるのではないかと期待している。

二つ目としては障がい特性の多様化がある。ゆったりとした空間でのマッサージを希望する方と動的な活動を希望する方が混在しているためバランスよく提供できるよう時間やスタッフの配置などに試行錯誤の毎日となっている。

一番の悩みは利用者の身体機能や状況も変化していく中でPTの派遣が1年に2回という回数少なさである。職員もこんな時どうしたらいいのかと悩むこともあり、もっと定期的に理学療法士の

令和元年度 体験交流セミナー③

派遣を受けられたら利用者の状況に合わせて支援も更新しやすく更なる効果が期待できるのではないか。

現在の座間養護学校との連携は先生方のご厚意もあり継続しているところだが、今後もより安定的に継続的に理学療法を提供するには近い将来別の方法を模索していかなければならない。

予算なども課題もあるがPTからは県の理学療法士会への相談を勧められており、そこから何か参考になる情報が得ることができればと思う。次年度も本体移行を進める中で、環境を整備し内容も回数も充実した理学療法の取り組みを継続していけるような方法を模索していく。

それはやはり、利用者さんをもっともっと笑顔にしたいというひびた職員一同の願いが根本にあるからである。そのために努力を惜しまず取り組んでいく所存である。